

小ぢり回顧
藤山ハシ展

画家の詩、詩人の絵
展の因縁



＜幻獣ケンムンと画者像＞コラージュ・シーン（絵画&物象）115.0×71.5cm、2016年

会期・2016年 4月15日(金) - 4月24日(日) 会期中無休
AM 11時 - PM 7時 (最終日5時まで)





＜ユージン・ラングストン像＞ 鉛筆、油淡彩
41.5×35.5 cm、1985年



＜ある浪漫的渚景＞ アクリラガッシュ、墨、和紙
55.0×53.5 cm、2012年

藤山ハン展に寄せて

土方明司

藤山ハンは1968年「人形」シリーズで衝撃的なデビューを果たした。闇の世界から召喚されたかのような、特異な作品群は絵画の常識を脅かし、みる者を震撼とさせた。以降、藤山はその長い画歴において一作ごとに闇の深度を下げ、濃密で混沌たる反世界を現出させている。単なる幻想絵画でないことは明らかである。幻想とは現実から派生し従属するが、彼が描く世界は現実と拮抗し、ある時は凌駕する。現実世界に対峙しうる、強固で固有の実在感を持つのである。それは、藤山の内的な視覚、強烈な幻視の力によって生まれるものだ。現実を貫き、闇の深淵を照射する眼差しによって、不可視であるはずの世界が現れる。それは現実を反転させた世界であり、隠されたもうひとつの現実でもある。この現れにより、弛緩した日常は俄かにざわめき、緊張が走る。

藤山は青年期に北海道、東北地方をさまよいながら絵を描いた。函館の地では、偶然出会ったある修道院の神父から、ひとつの啓示を受け、絵画の方向性を確認したという。放浪と曲折の後、故郷奄美に帰った彼は、「見えていながら、どうしても見えないものの世界や、すぐ近くに有りながら、手の届かぬ深淵が、確かに存在する」ことを確信したという。おそらく、画家自身の魂の深奥に眠る、不可視の領域に鋭敏に感応する回路が覚醒したのであろう。幻視の発動である。

こうして生まれた「人形」シリーズは、現代美術を痛打する異端として、瀧口修造はじめ多くの識者に強烈な印象を与えた。それは、停滞した現代の美術に対する、マレビト的な役割を果たしたともいえる。以後、「屠殺場」「黄泉の花嫁」「焼け棒」「ポスト」の各連作によって、着実に独自の世界を深化させてきた。

今回の展覧会では、旧作とともに近作として、奄美の地霊をモチーフにした作品も出品される。封印されたもう一つの現実が再び顕現されるに違いない。実に久しぶりとなる個展、しかも20代の混沌期を過ごした揺籃の地、新宿での開催が今から楽しみである。

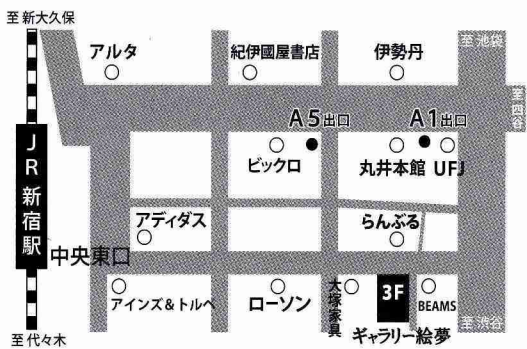
(美術評論家・平塚市美術館 館長代理)

略歴

- 1941年 鹿児島市生まれ
- 1958年 母の死に伴い、奄美大島の地を踏む
- 1962年 北の地、自然界景に憧れ旅する。画帖を残し、帰途後絵画の道を意志する
- 1968年 <人形> シリーズによる記録映像「A DOLL」
(ドナルド・リッチー制作、ニューヨーク近代美術館収蔵)
- " 初個展(東京セントラル美術館)
- 1987年 画集出版(形文社)
- " 自選展開催(横浜市民ギャラリー)
- 1988年 住居火災に遭う。後に焼跡現場より拾い集めた遺物類でオブジェ作品制作
- 2000年 「20世紀回顧・鹿児島と洋画展」(鹿児島市立美術館)
- 2001年 パリ郊外、オーヴェルのゴッホ墓参の機を得る。旅路スケッチを残す
- 2005年 「瀧口修造・夢の漂流物」(世田谷美術館、富山県立近代美術館)
- 2010年 <火焰の獅子たち 燦の遠淵に・陽炎う言霊貌氏の幻影>
長年の集大成作 ``コラージュ・シーン`` 完結す
- 2014年 「スサノヲの到来ーいのち、いかり、いのり」(足利市立美術館、ほか巡回展)
- 2015年 「画家の詩、詩人の絵」(平塚市美術館、ほか巡回展)


ギャラリー絵夢。

〒160-0022 新宿区新宿 3-33-10 新宿モリエールビル 3F
Tel/Fax: 03-3352-0413 www.moliere.co.jp/gallery/



＜アクセス＞ JR/新宿駅 中央東口徒歩3分
地下鉄/丸の内線 副都心線 都営新宿線
新宿三丁目駅 A1 A5 出口徒歩1分